

文化知普及協会基礎講座

第一講 人類学的知性で解説する価値形態論

2021年11月7日 榎原 均

基礎講座開講にあたって

在野研究者の私が主宰した私塾的な講座は、政治・文化講座（1997～2002年）で、その記録はHP オフィス榎原に掲載されています。また単行本も何冊かあります。基礎講座に関連する書籍は『「資本論」の核心』（情況新書）ですが、今回のウェブ講座では、これまでとは違った方法論で話したいと考えるに至りました。

私は理学部出身で、在学中から安保闘争に関わり、ロクに授業に出ていません。当時の理学部は教養部では学部の学科には所属していなくて、3回生になるときに学科を選びます。ノーベル賞を取った湯川秀樹に憧れて理学部に入学したのですが、学生運動に明け暮れた2年間で、物理学科や化学学科には志望者が多くて分属試験があり、到底受かりそうにもないので動物学科を選びました。学部でもほとんど出席しなかったので、7年間在籍の後中途退学となりました。

では学生時代に何を研究したかと言えば、理論的にはマルクス・レーニン主義であり、具体的対象としては、人間の政治的実践を体験しつつ研究してきたのです。学部時代の同級生は、動物学、霊長類研究（サル学）、生物物理学、人類学、等々の権威になっていて、たまたま教養部時代の同じクラスに利根川進がいたので、彼がノーベル賞を取ったのちに定期的にクラス会が開かれるようになり、たまに参加するようになりました。みなさん退職したころでしょうか、クラス会で懇談しているときに、自分は何をしてきたかについて報告するはめになり、その時に自分は現在の社会を人類学の対象として研究してきたのだ、と言ったのです。

数年前のことで、この時にはまだラトゥールなど読んだこともなかったのですが、人類学の本は結構読んでいたのです。1990年前後に、1960年代の三菱重工系列の広島県三原市の工場での不当解雇に反対する闘争現場で知り合っていた栗本慎一郎の『パンツをはいた猿』等々を読んで以来、ポランニー、モース、レヴィ＝ストロースなどを読み（『親族の構造』は理解できなかったですが）、そのあとも文化論の解明をめざして、ギアツやサーリンズなども読みました。本を読むときに指導教官もいないし学会のしきたりも知らないので、デュルケムなども読まなければならないのですが、ちらっと見て興味湧かないので未読に終わっています。

私はラトゥールが主張したアクター・ネットワーク理論について、彼はその先駆者をデュルケムと論争し忘れ去られたタルドに求めています。私はマルクスこそがその先駆者だと考えていて、それを彼に伝えるべく準備中なのですが、うまく文章化できないまま現在に至っています。

また私の独創的な『資本論』解釈も、学界では無視され続けているのですが、その理由も大体わかってきました。結局私の経済学研究も無意識のうちに人類学の方法を使っていたのでしょう。ですから、伝統的な哲学や社会科学の方法に依拠した人文科学者や社会科学者には理解の彼方にあっただけでしょう。

このような自身の実践についての理解にもとづいて、おそらく最後の機会となるこの講座では、近代科学の方法を止揚した人類学の方法についての明確な意識性をもって取り組むことにします。

現代社会を人類学的方法で観察するといっても、これまでの人類学ではそのような試みは多くはないでしょう。ラトゥールのアクター・ネットワーク理論はその一つですが、ここ

ではアクターのふるまいに注目することが強調されていて、枠組みが狭いように感じます。むしろ、レヴィ＝ストロースの野生の思考にまで立ち返って、方法について探求する必要性を感じています。とりあえずは「具体の科学」とプリコラージュです。それだけでなく、彼はマルクスの理論も人類学的視角からのものだとみていました。マルクスの剰余価値論について次のように述べているのです。

「マルクス主義の基本的な問題は労働がなぜ、いかにして剰余価値を生むかということである。それに対するマルクスの回答が民俗学誌的なものであったことは多くの場合気づかれていない。原始の人類は人口が限られていた分、労働に対する収支がよい自然条件の地域に定着した。いっぽう、剰余価値と労働の関係においては前者が後者に付加されるような関係を設定することは文化——民族学の意味での文化——の本質的な特性である。ひとつは論理的な、もうひとつは歴史的なこれらふたつの理由から、出発点においてはあらゆる労働は必然的に剰余価値を生んだと想定できる。人間による人間の搾取はその後にくるものであり、具体的には歴史のなかで、植民者による被植民者の搾取のかたちで、いいかえれば、原始人がまったき処分権をもっていた剰余価値の剰余部分を前者が奪取するというかたちで出現した。『あらゆる必要を満たすのに週 12 時間の労働がこの島民に必要なだと仮定しよう。自然が彼に与えた恩恵は、たっぷりとした余暇である。彼が自分のために余暇を生産的に使うには、歴史的な一連の出来事が生じなければならない。他人のための過剰労働に使うには、そのように強制されねばならない。』（『資本論』）

結果としてまず、植民地支配は論理的・歴史的に資本主義に先行すること、そして資本主義体制は、それに先立って西欧の人間が土着の人間を扱ったやり方で西欧の人間を扱うことにある、と結論される。マルクスにとって資本家と労働者の関係は植民者と被植民者の関係の一特殊例にほかならない。この視点からすれば、マルクス主義の思想においては経済学と社会学は、民族誌学の一部として誕生したとほとんど言えそうである。このテーゼは、『資本論』（第一部、第 24 章）にきわめて明確に書かれている。資本主義の起源は、アメリカの金銀産地の発見に、次いで現地住民の奴隷化に、次いで東インドの征服と略奪に、次いでアフリカを『黒人狩りのための一種の商業的飼育場に転化すること』に求められる。『これらは資本主義時代の曙光を告げる本源的蓄積の牧歌的手段である。』まもなく商業戦争が勃発し、全地球を舞台にする。『要するに、ヨーロッパでの賃金労働者の偽装奴隷制の踏み台として、新世界での露骨な奴隷制を必要としたのである』（『構造人類学』2 所収「社会経済的發展と文化的不連続性」渡辺公三『闘うレヴィ＝ストロース』177～8 頁より重引）

私はフーコーの晩年の講義録にも注目していますが、このように考えるとフーコーの仕事も文字通り「具体の科学」であり、プリコラージュではないかと考えるようになりました。フーコーは個物ではなくて個と個の間関係についていつも考察しているのですが、これは近代的理性の彼方にあり、近代的理性よりは神話的思考としてくくられている認識の領域を現代化するものではないでしょうか。とりあえずは問題意識だけでこれから解明しなければならないのですが。

第一部 現代社会を人類学的知性で斬る視点

1. 人類学的手法の妥当性

私の人類学は、ラトウールと同じく現代社会を人類学的知性で斬る、というもので、今回の試みはその初めての報告です。それでやはり人類学的手法について簡単に説明しておきましょう。まずは人類学的知性を現代社会解明に用いることの妥当性について確認していきましょう。

人類学にはフィールドワークが不可欠ですが、私たちは今まさに現代社会で生活しているわけで、フィールドの真ただ中にいます。不足は現実の自身の生活を参与観察する人類学的知性です。そして万人が人類学者になることが、このさまざまな問題をかかえている人類の課題解決のためには必要なのです。なお、人類学的知性とは、私たちが幼少時から教育

によって刷り込まれている科学的理性よりも幅広い知の形態です。

2. 手法としての具体の科学とプリコラージュ

レヴィ＝ストロースが『野生の思考』第一章で提起した「具体の科学」と、それによって得られた情報のプリコラージュによる構成、これを手法とします。レヴィ＝ストロースは、この得られた情報から「不変式」をつくらうとしているのですが、それには関与しません。

人類学は、近代になって細分化されてきた科学のなかでは異端児で、フィールドワークの対象である現代社会を諸科学も含め全体として観察します。その時の手法が「具体の科学」です。

レヴィ＝ストロースは、現代社会をフィールドにしたわけではありませんが、未開人の野生の思考について解明し、それが現代社会を病巣から救い出す働きを持つことを指摘しています。前置きはこれくらいにして、レヴィ＝ストロースの述べるところを聞いてみましょう。

『野生の思考』では、まず「未開人」の知性についてのフィールド研究者たちのさまざまな報告を紹介しています。そのいくつかを引用しておきましょう。

「現地人は鋭い能力でもって、海陸の全生物の諸属性や、風、光、空の色、波の皺、さまざまな磯波、気流、水流などの自然現象のきわめて微細な変化を正確に記すことができた。」（『野生の思考』、4頁）

「平地に住みキリスト教化された隣接諸部族と異なるこのネグリトの特徴は、動植物についての底知れない博識である。驚くほど多数の植物、鳥類、哺乳類、昆虫の種類を識別するだけでなく、それら動植物一つ一つの習性についての知識が深い……」（同書、5頁）

レヴィ＝ストロースは、未開人の思考と、現代の科学的思考、あるいは抽象する思考との違いを言い立てる見解に対して、客観的知識に対する意欲は異ならないこと、とりわけ知的操作と観察方法は同種のものであることを示すためにこのような報告を引用したのでした。そして、次のように結論付けています。

「このような例は世界のあらゆる地域からもってくることができるが、これから容易につきの結論が引き出せよう。すなわち、動植物に関する知識がその有用性に従ってきまるのではなくて、知識があればこそ、有用ないし有益という判定が出てくるのである。」（同書、12頁）

ところでレヴィ＝ストロースは、動植物や自然現象に対するこのような分類された知識体系の背後にある秩序づけの要求について考察しています。

「『聖なるものはそれぞれあるべき場所になければならない』と、思慮深いある現地人は深い意味を込めてこう述べた。まさにそのことこそが聖なるものを聖なるものたらしめるのだとさえ言うてよいだろう。たとえ頭の中だけのことにせよ、聖なるものをなくせば、世界の秩序はすっかり破壊されてしまうであろう。あるべき場所を占めているということで、聖なるものは秩序の維持に役立っているのである。」（同書、13～4頁）

この聖なるものについて儀礼を伴う呪術的思考と把握して、これと科学を比較して次のように述べています。

「この観点からすれば、呪術と科学の第一の相違点はつぎのようなものになるだろう。すなわち、呪術が包括的かつ全面的な因果関係を公準とするのに対し、科学は、まずいろいろなレベルを区別した上で、そのうちの若干に限ってのみ因果性のなにかの形式が成り立つことを認めるが、ほかに同じ形式が通用しないレベルもあるとするのである。しかしながら、さらに一步を進めて、つぎのように考えることはできないだろうか？ すなわち、呪術的思考や儀礼が厳格で緻密なのは、科学的現象の存在様式としての因果性の事実を無意識に把握していることであらわれであり、したがって、因果性を認識しそれを尊重するより前に、包括的にそれに感づき、かつそれを演技しているのではないだろうか？ そうなれば、呪術の儀礼や信仰はそのまま、やがて生まれ来るべき科学に対する信頼の表現ということになるであろう。」（同書、15～6頁）

このように述べた後、レヴィ＝ストロースは、未開人が感覚に直接与えられるものの体系化を成し遂げ、科学はその体系の一部にしか関心がなく、全体性はその考慮の外にあったが、しかし、今日の科学は全体性の解明に向かっているという意味で、未開人の思考を二重の意味での先駆けと見なしているのです。そして、呪術と科学を発展段階的に位置づけるのではなくて認識の二様式として並置することを提案しています。そして野生の思考に見られる具体の科学について次のように位置づけています。

「しかしながら具体の科学は、近代科学と同様に学問的である。その結果の真実性においても違いはない。精密科学自然科学より一万年も前に確立したその成果は、依然としていまのわれわれの文明の基層をなしているのである。」(同書、21～2頁)

これはどういう意味でしょうか。その謎ときは本書の最後の一文で明かされています。第九章、歴史と弁証法は、サルトルの『弁証法的理性批判』への反論で、弁証法自体には今回は触れませんが、この書は次のように締めくくられています。

「今世紀なかばに至ってようやく、コミュニケーションの迂回路をとって自然界(物理的世界)に接近する道と、最近発見された、物理学の迂回路を通してコミュニケーションの世界に近づく道という、長らく別々だった二つの途が交わったのである。人知の全過程は、こうして閉鎖体系の性質をもつに至る。科学精神は、そのもっとも近代的な形において、科学精神のみに予見しえた出会いにより、野生の思考の原理の正当化とその権利の回復に貢献しうるものである。それを認めることはすなわち、野生の思考への教えへの忠誠をまもることにはほかならない。」(同書、325頁)

私はこの内容について詳述する知識はありません。おそらく感覚を通して自然と人間社会を理解する野生の思考と、情報理論による対象把握という二つの途の交わり、ということのようです。

次にプリコラージュ(器用仕事)ですが、これについてレヴィ＝ストロースは次のように述べています。

「玄人とはちがって、ありあわせの道具材料を用いて自分の手でものを作る人のことをいう。ところで、神話的思考の本性は、雑多な要素からなり、かつたくさんあるとはいってもやはり限度のある材料を用いて自分の考えを表現することである。何をする場合であっても、神話的思考はこの材料を使わなければならない。手元には他に何もないのである。したがって神話的思考とは、一種の知的なプリコラージュである。これで両者の関係が説明できる。」(同書、22頁)

つまり、私たちが運動方針を立てるときに、運動方針(神話の領域)を具体の科学による雑多な知識を組み立てますが、そのことをいっているのですね。ラトゥールのアクター・ネットワーク理論に通底しています。

3. レヴィ＝ストロースの経歴

レヴィ＝ストロースをちゃんと研究したことはないですが、『野生の思考』や、『悲しき熱帯』を読むと何か響くものがあるのです。今回渡辺公三『闘うレヴィ＝ストロース』(平凡社)を読んでみてその謎が解けました。マルセル・モースやカール・ポランニーの人類学にも同じような響くものがあつたのですが、それは彼らが人類にとって悪夢のような両大戦の時期に革命運動に従事しそしてその敗北に直面して、マルクス主義の見直しを求めて人類学を始めたことにあります。レヴィ＝ストロースの年譜を簡単に紹介しておきましょう。

1908年 生まれ

1926年 学生時代に共産主義の政治運動に関わり『グラックス・バブーフと共産主義』を出版、以降1930年まで運動に従事。論文多数。

1931年(23歳)「社会主義の展望」をめぐる論争に参画。秋に兵役義務につく。

1935年 サンパウロ大学に職を得てブラジルへ。大学で社会学を講義しながら『悲しき熱帯』としてまとめられたフィールドワークを行う。たびたび大西洋を往復。

1941年 アメリカに亡命。ロマン・ヤコブソン(言語学者・民俗学者)と出会う。

1945年 パリ解放後、一時帰国
1947年 『親族の基本構造』完成、年末にパリに戻る。
2009年 死去

渡辺はモースにも言及しています。モースは第一次大戦前にはフランス社会主義の活動家で、協同組合運動に参画していました。(『闘うレヴィ＝ストロース』付論参照。) モース『贈与論』(1925年)は、第一次大戦後の左翼の敗北の総括だと思われます。

ポランニーは、第一次大戦後にできたハンガリー評議会共和国政府の一員でした。彼の『人間の経済』はよく読み込みましたが、これは『大転換』における市場批判の反省です。

あと、渡辺の書籍からレヴィ＝ストロースの発言などをいくつか引用しておきます。

「さまざまな社会の豊かさと同様性という、記憶をこえた昔からの人類の遺産のもっとも素晴らしい部分を破壊し、さらには数え切れないほどの生命の形態を破壊することに没頭しているこの世紀においては、神話がしているように、正しい人間主義は、自分自身から始めるのではなく、人間のまえにまず生命を、生命のまえには世界を優先し、自己を愛する以前にまず他の存在に敬意を払う必要がある、というべきではないだろうか。」(『食卓作法の起源』より、同書、26頁より重引)

『野生の思考』はこの自然と親和的な思考の活動を、ポジティブなかたちで取り出すことを目的としている。その出発点には、民族誌に報告された狩猟民、農耕民などの自然への細心の注意力にもとづく『具体の科学』とも呼べる思考が、具体的な感覚データを直接の素材として組み立てられ、感覚性を切り捨てることで成立する近代科学とは一見異質的な構成原理をもつと指摘されている。この『野生の思考』の素材は、抽象概念ではなくむしろ記憶がとどめられた知覚の断片であり、それが万華鏡のように不断に組み立てなおされて世界の解釈のための枠組みとしての神話が構築される。この構築の過程は、ありあわせの素材から作品を組み立てる創作活動になぞらえて器用仕事という新鮮なイメージで示され、神話と芸術作品との対比という視点とともに人々に鮮やかな印象を残した。」(同書、185～6頁)

「私が『野生の思考』とっているものは、それによって『他者』を『わたしたち』に翻訳したりまたその逆をおこなうことができるようなあるコード(ルール、文法の意)をつくりだすのに必要な前提や公理の体系であり・・・私の意図においては、彼らの位置に自分を置こうとする私と、私によって私の位置に置かれた彼らとの出会いの場であり、理解しようとする努力の結果なのです。」(ポール・リクールインタビュー、同書から重引、253頁)

先に見たように、レヴィ＝ストロースは、マルクスの剰余価値の理論に人類学的視角があることを指摘しましたが、私は、商品の価値形態に即して、人類学的知性で読んでみます。

4. 構造主義とは

ネットに出ている構造主義の定義・意味です。

定義：構造主義とは、人間の社会的・文化的現象の背後には目に見えない構造があると考える思想を指します。簡単にいうと、実は社会の深層に「目に見えない構造」があって、それが目に前にみえる「人間の社会的・文化的現象」を形作っているということです。

第二部 価値形態を人類学的知性で読む

1. マルクスによる貨幣生成の秘密の消去

①現行版『資本論』価値形態論

A) 第I形態(簡単な価値形態)

X量の商品A=Y量の商品B

B) 第Ⅱ形態(全体的な価値形態)

$$\begin{aligned} X \text{ 量の商品 A} &= Y \text{ 量の商品 B} \\ &= Z \text{ 量の商品 C} \\ &= W \text{ 量の商品 D} \\ &= \dots \end{aligned}$$

C) 第Ⅲ形態(一般的な価値形態)

$$\left. \begin{aligned} Y \text{ 量の商品 B} &= \\ Z \text{ 量の商品 C} &= \\ W \text{ 量の商品 D} &= \\ \dots &= \end{aligned} \right\} X \text{ 量の商品 A}$$

D) 第Ⅳ形態(貨幣形態)

$$\left. \begin{aligned} Y \text{ 量の商品 B} &= \\ Z \text{ 量の商品 C} &= \\ W \text{ 量の商品 D} &= \\ \dots &= \end{aligned} \right\} V \text{ 量の金}$$

貨幣形態に変更された初版本文第Ⅳ形態は、人格が登場しない価値形態論では貨幣生成の不可能という次に挙げる形態でした。これを受けて第 2 章交換過程論で貨幣生成が解かれたのです。

D) 第Ⅳ形態(初版本文第Ⅳ形態)

$$\begin{aligned} X \text{ 量の商品 A} &= Y \text{ 量の商品 B} \\ &= Z \text{ 量の商品 C} \\ &= W \text{ 量の商品 D} \\ &= \dots \\ Y \text{ 量の商品 B} &= X \text{ 量の商品 A} \\ &= Z \text{ 量の商品 C} \\ &= W \text{ 量の商品 D} \\ &= \dots \\ Z \text{ 量の商品 C} &= X \text{ 量の商品 A} \\ &= Y \text{ 量の商品 B} \\ &= W \text{ 量の商品 D} \\ &= \dots \end{aligned}$$

② 平易化による貨幣生成過程の消去

いきなり価値形態論を取り上げますので、理解の前提について簡単に触れておきましょう。商品とは使用価値と交換価値(価値)の二重物です。使用価値とは商品の自然的質に由来する人にとっての役立ちです。他方交換価値とはその価格として商品の値札に表示されています。この交換価値は、商品と貨幣との関係ですが、それを商品と商品との等置の関係に遡って貨幣の生成を解き明かそうという試みが価値形態論です。

価値形態論は等式として表現されていますが、単なる数式ではなくて、商品の感覚的に把握できる諸使用価値が同じ価値をもっていることの表示です。つまり異なる商品の使用価値の価値としての同一性を表現しているのです。

等式は左辺と右辺に分かれて表記されますが、左辺に置かれた商品は相対的価値形態と

名付けられ、右辺に置かれた商品は等価形態と名付けられています。人類学的に言えば、使用価値は自然物（人間労働が加えられていますが、これも自然物です）ですが、これが他の商品と社会的関係を取り結んでいる形態が価値形態です。自然から社会への商品の移行の形態と見ていいでしょう。そして自然物が社会的形態を一步一步確立していく過程として価値形態論を読むことができます。

さて、初版と比べて、現行版では第Ⅳ形態を貨幣形態にしています。これは初版のゲラを読んだエンゲルスが、理解に困難なので改善するよう要請し、マルクスは初版本文価値形態論の修正はせず、学校教師風にした付録をつけました。この付録では、価値形態論の第Ⅳ形態は本文のそれとは違って貨幣形態とされています。そしてそれが第二版で本文に採用され、現行版に引き継がれました。ですから、マルクス自身が書き残した価値形態論は、三つの異文があることとなります。

価値形態論では商品の担い手である商品所有者（人格）は捨象され、商品自体の関係を考察するところから、価値の秘密と謎の解明を試みたものです。三つの異文のうち初版本文だけが第Ⅳ形態を貨幣形態にはしていません。結論から言うならば、この初版本文ではマルクスは価値形態論だけでは貨幣生成は解けず、商品所有者たちが登場する次章交換過程論を待たなければならない、と考えていたのです。しかし、平易化の要請に応じたために、価値形態論と交換過程論にまたがる形での貨幣の生成論を度外視し、無理して貨幣形態を価値形態論に編入してしまったのです。これは学問的に見て大きな損失ですが、研究者でこのことについて言及した人はいません。私はこのことが判明して以降『価値形態・物象化・物神性』（1990年）で問題提起しましたが、研究者からは全く無視されています。

その理由は二つあります。ひとつは、初版本文の記述はヘーゲルの反照の弁証法を転倒させた方法で叙述されていて、科学的理性だけでは理解不能だということがあります。もうひとつは、初版本文の貨幣生成論からは、貨幣の生成は、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によるという結論が導かれますが、これを認めると政治権力を掌握してその権力でもって社会革命を行うというマルクス・レーニン主義の革命理論の再検討をしなければならない、という政治的理由です。

ここでは人類学的手法で解読することによって、マルクスとは別の視覚から価値形態論を解読していきます。

2. 商品から貨幣が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって生成される仕組み

人類学的に見れば、この体系は左辺が自然で右辺が社会であることは見え見えです。自然から社会がどのように生まれてくるか、その構造が描かれているのです。日本でも構造主義は流行し、先に紹介した「人間の社会的・文化的現象の背後には目に見えない構造があると考える思想を指します。」というような理解が横行しているのに、なぜ価値形態論をこの観点から読み込む研究者が出ていないのでしょうか。今村仁司の試みはありますが、第三項排除を第一形態の誤読によって説明していて、失敗作です。なお、初版本文についての詳しい研究はマルクスの記述も含め拙著『「資本論」の核心』にあります。そこからの引用を資料としてつけておきます。マルクスの文章も長々と引用してあります。ぜひ直接マルクスの文章にあたってみてください。

A) 第Ⅰ形態(簡単な価値形態)

X 量の商品 A = Y 量の商品 B

ここでの問題は、商品Aが、自分に商品Bを等置しているのか、それとも、自分を商品Bに等置しているのか、ということです。後者だと、商品Aは商品Bを同等化しているということで分かりやすいし、それはこの等式を、主語＝述語という論理式として読んでいくことになります。しかし、ここではそうではなくて、商品Aは、自分に商品Bを等置しているの

です。いわば相手に判断をゆだねているのですね。つまり自分だけでなく、相手も主体として扱っているのです。

このところは、今村仁司が『暴力のオントロジー』（勁草書房、1982年）で、商品Aが、自分を商品Bに等置していると読んで、これを暴力の始まりとみなしました。それは、初版の誤訳に基づくもので、商品Aは、自分を商品Bに等置しているのではなくて、逆に自分に商品Bを等置しているのだということは、私には、80年代からわかっていました。ところが、相手を主体として扱っているという理解には至らず、批判できないでいました。しかし、第Ⅰ形態が、自分の価値を相手に判断してもらおうという関係、つまり相手を歓待する作法がそこにはあることが分かれば、ここは暴力の始まりではなくて分かち合いの関係なのですね。（このことに気づいたのも2017年末でした。今村説はおかしいと思っていましたが、30年ぶりに批判できました。）

私は、この二つの読みの違いを言葉で表現しようと努力してきました。しかし、これは、無理な試みだったことが分かりました。商品Aが、自分を商品Bに等置する、という読みは、二つの商品のことなる使用価値が、同じものだという判断が含まれています。この判断は端的に誤りなんです。他方、商品Aが、自分に商品Bを等置している、という読みの場合は、異なる二つの使用価値とは別の共通なものをこの等式は表現しているのです。

マルクスは第Ⅰ形態の分析では、この共通なもの、人間労働が、二つの商品の関係でどのように抽象化されていくかという事態抽象の仕組みを明らかにしているのですが、それは、実は、主体と主体との反照関係の分析でした。反照の弁証法から価値形態を読み解くのは次回第二講の課題です。

マルクスの叙述に即した解説は資料を参照していただくとして、ここでは自然からの社会の生成という人類学的視点から、簡単な価値形態を考察しましょう。自分の生産物を他人の生産物に商品として関係させるときに所有者たちはお互いに値付けし合います。そしてある割合で落ち着きますが、その時の商品どうしの関係を所有者の存在を捨象して考察することが課題でした。このことは実はこの関係がもっている「目に見えない構造」を捉えるということです。商品を交換しようとしている商品所有者たちは関係することで社会を形成しているのですが、その社会の目に見える内実つまり「人間の社会的・文化的現象」を決める構造として価値形態を考察するのです。

B) 第Ⅱ形態（全体的な価値形態）

$$\begin{aligned} X \text{ 量の商品 A} &= Y \text{ 量の商品 B} \\ &= Z \text{ 量の商品 C} \\ &= W \text{ 量の商品 D} \\ &= \dots \end{aligned}$$

ここでは商品Aは、さまざまな商品を主体として扱っています。そうすることで商品Aの価値が、さまざまな労働に共通な抽象的人間労働であることを表示しているとマルクスは説明していますが、人間社会の目に見える形の背景には、目に見えない抽象的人間労働の関係があり、その関係に人間の社会は支配されているということになります。

C) 第Ⅲ形態（一般的な価値形態）

$$\left. \begin{aligned} Y \text{ 量の商品 B} &= \\ Z \text{ 量の商品 C} &= \\ W \text{ 量の商品 D} &= \\ \dots &= \end{aligned} \right\} X \text{ 量の商品 A}$$

第Ⅱ形態を逆から見れば、この第Ⅲ形態となります。ここでは、商品Aはすべての商品によって一般的な等価物として表示されています。一般的等価物としての商品Aの表示は、商品A以外のすべての商品が、共同して商品Aを主体として扱っていることの結果です。

ここで商品Aははじめて社会の象徴として出現しています。商品Aによって、第Ⅱ形態ではばらばらであった取引関係が一つのまとまった社会に形成されたのです。

この一般的等価物の関係は貨幣関係と同型ですが、しかし、貨幣生成には人格の登場が必要です。とまれ、人類学では貨幣を象徴とみる見解は古くからあります。例えば吉沢英成『貨幣と象徴』（日本経済新聞社）、また社会の象徴は王様ですから、暴力との関係で貨幣を理解するオレルアンら『貨幣主権論』（藤原書店）の見解もあります。そして今村の第三項排除論によれば、一般的等価物は諸商品の協力のたまものですが、この協力によって排除された一般的等価物が一つのものに固定される貨幣関係となると、これが逆に力をもつというように解釈されています。これらについては1999年に「悪貨が良貨を駆逐する——お粗末な貨幣論の横行」を書きました。

<http://www.office-ebara.org/modules/xfsection05/article.php?articleid=54>

しかし、これらの見解は、マルクスの初版の貨幣生成論を踏まえていません。ではその考察に移りましょう。

D) 第Ⅳ形態(初版本文第Ⅳ形態)

X 量の商品 A = Y 量の商品 B
 = Z 量の商品 C
 = W 量の商品 D
 =

Y 量の商品 B = X 量の商品 A
 = Z 量の商品 C
 = W 量の商品 D
 =

Z 量の商品 C = X 量の商品 A
 = Y 量の商品 B
 = W 量の商品 D
 =

この第Ⅳ形態は、『資本論』初版本文価値形態論にだけ登場しています。この社会的象形文字は、人格が登場しない商品の価値形態論の領域だけでは一般的等価物からの貨幣の生成は解明できず、商品の交換過程での人格の登場を待つことで貨幣が生成されるということを表示しているのです。つまりそれぞれの商品が、すべての商品を自らに等置し、相手を主体として扱くと、商品世界の統一的秩序は生まれないという意味を表現しているのです。本来商品所有者たちは自分の商品で他の諸商品が購入できればということありません。その関係がこのような第Ⅳ形態となり、一般的価値形態で示された社会的まとまりは破壊されてしまいます。そしてこの商品世界の社会的まとまりを示していた第三形態を恒常的なものとするには、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為が必要だったのです。

E) 第Ⅴ形態(交換過程と貨幣形態)

X 量の商品 A =

Y 量の商品 B =

Z 量の商品 C =

..... =

 } V 量の金

第二章 交換過程、でマルクスは商品所有者を登場させます。この人格は「自分の意志がそれらの物においてある定在をもつところの諸人格」（初版交換過程）とされています。交換過程に登場する商品所有者は、第Ⅳ形態を受けて、考える前に行動して、無意識のうちでの本能的共同行為に参加し、そのことで貨幣を生成します。人格が介在しなければ貨幣は生

まれないのです。念のため確認しておきますが、ここでの本能は、生物としての人間に備わっている本能ではありません。それは本能のように働いていますが、商品の価値形態が商品所有者たちに暗示しているサインによるものであり、商品の本性をそれに意志を宿した人間が新たに獲得する社会的本能です。人類学的知性からすれば文化の領域にあるものです。

ところで貨幣の生成は人格の関与なしにはあり得ないのですが、この人格の関与とは、商品の本性に自らを無意識のうちに従わせ、単一の商品を自分に等置するという行為を行わせています。そうすることによってしか、商品世界の社会的関係は形成されないのです。商品・貨幣の事物化（物象化）とは商品の本性に商品所有者が意志支配されて貨幣を生成するということにあるのです。ところがこの行為は無意識のうちに行われますから意識されません。

貨幣は商品所有者たちが自らの生産物を商品として交換過程で価格をつけて送り出されるつど、生成されているのですが、価格をつけるということは意識されますが、共同行為に参加しているということは意識に登りません。ですから商品所有者たちは、貨幣が既に存在しているから値付けできると考えていて、値付けの行為が貨幣を都度生成しているという現実には理解の外にあるのです。

3. まとめに代えて

このような人類学的知性からする価値形態論解説から、人間社会に関してどのような理解が与えられるでしょうか。

① 商品・貨幣・資本の支配という「目に見えない構造」の解明

商品・貨幣・資本の支配は、事物（物象）による人格に対する意志支配であること、これが商品の価値形態という「目に見えない構造」の働きです。

② 資本への対抗の路線

この資本の支配を廃絶するには、意志支配を無化する脱事物化（物象化）の運動によらねばならないでしょう。これを現実の社会で実現している雇用労働によらない働き方、自営業や協同組合は、資本に対抗する陣地です。

③ 階級闘争の理論の総括

階級闘争の理論は、ブルジョアジーとプロレタリアートの闘争の理論で、プロレタリアートが政治権力を奪取して、しかる後に商品・貨幣・資本関係を廃絶する社会革命に着手するという内容でした。しかし、商品・貨幣・資本関係の基礎にある、商品からの貨幣の生成が、商品所有者たちによる無意識のうちでの本能的共同行為であることが判明すれば、これを国家権力という意志の力でなくす試みは背理です。

④ 陣地戦の理論確立に向けて

現在、資本と国家に対抗する陣地がいたるところで形成され陣地戦が闘われています。この陣地を土台にした陣地戦の理論は人類学的知性によって切り拓かれるのではないのでしょうか。以降の基礎講座の課題です。

● 追加資料『ASSB』第27巻5号より

商品から貨幣を生成させない交易関係の構想

はじめに

次の二つの形態は、マルクスの『資本論』初版にはなくて、私が新たに考案した構想であ

る。この構想の骨子は、昨年末の揚州大学での、第6回中日社会主義フォーラムにいたる過程で発案したものであり、今回それを大幅に改善している。

F)第VI形態(だれもが貨幣形態になりうる=地域通貨=一般市場の外部)

一枚の上着	=	}	二〇エレルのリンネル
一〇ポンドの茶	=		
四ポンドのコーヒー	=		
.....	=		
二〇エレルのリンネル	=	}	一着の上着
一〇ポンドの茶	=		
四ポンドのコーヒー	=		
.....	=		
二〇エレルのリンネル	=	}	一〇ポンドの茶
一枚の上着	=		
四ポンドのコーヒー	=		
.....	=		

現実の一般市場では、第IV形態の矛盾は、交換過程での、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって、貨幣生成の運動として、解決されている。しかし、第IV形態は、貨幣を生成する一般市場に向かわずに、貨幣を生成しないもう一つの経済が成立しうることを暗示している、と読みとれないであろうか。この観点から、第IV形態を転倒させて第VI形態を描いてみよう。この形態で等価形態にある商品の所有者たちは、どのような社会的関係をもつだろうか。

その一つが地域通貨である。地域通貨の場合は、自分の生産物で、他の人の商品が買えるが、それは地域通貨のメンバーが、一般市場の外部で共同体を構成しているからだ。

一般市場の外部に形成されるこの新たな交易関係は、主体相互が分かち合える関係の萌芽が、作り出されていると想定できないだろうか。主体相互の分かち合いが可能な社会システムが、この第VI形態で示唆されていて、それへの移行が展望できるのではないだろうか。というのも、この形態は資本主義の下でも実現可能である。そしてこの形態の占める領域が拡大していけば、現在の主流である、無意識のうちでの本能的共同行為によって生み出されている本来の貨幣形態の占める一般市場の領域が狭まっていくであろう。

G)第VII形態(貨幣形態なし=労働に応じた分配<労働証書制>=もはや価値形態ではない)

消費資料		労働提供者
Y量の財B	}	=X量の労働I
Z量の財C		
W量の財D		
.....		
X量の財A	}	=Y量の労働II
Z量の財C		
W量の財D		
.....		
X量の財A	}	Z量の労働III
Y量の財B		
W量の財D		

第Ⅳ形態を転倒させて第Ⅵ形態を描き出したが、これはまだ商品の関係である。さらに、それを社会化された労働の関係として、第Ⅶ形態をたててみよう。

社会化された労働とは、個々人が共同体のメンバーになることで実現できる。そうすると、この形態は、マルクスが、コミュニズムの低い段階の分配様式として述べた、「労働に応じた分配」を表示していることが分かる。等価形態の位置にある、各種の労働提供者たち（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）は、社会の総生産物から社会の維持に必要な諸経費（注）を差し引いた後の残りの消費資料を、各人が社会に提供した労働に応じて、受け取ることができる。つまり、この第Ⅶ形態は、社会主義市場経済が、市場をのりこえる構想を描き出す際の素材としての意義、をもっているのではなかろうか。かつての計画経済に代わる、次のシステムへの移行の構想を、ここに読み取ることができる。

いずれにしても、第Ⅳ形態を転倒した第Ⅵ形態の形と、さらにそれを進化させた第Ⅶ形態まで含めたこの社会的象形文字の図一枚で、貨幣の生成と、貨幣生成のない社会の富の仕組みが表現できる。伝統的な左翼の革命論である、権力奪取の発想からは、現実に存在している、社会主義市場経済からコミュニズムへの移行を構想できない。マルクスの時代には、社会主義市場経済は存在しておらず、またその構想もなかったが、しかし、『資本論』初版本文価値形態論には、その処方箋が描かれていたことになる。いまこそ、この処方箋を具体化していく時ではないだろうか。

（注）周知のようにマルクスは『ゴータ綱領批判』で、控除すべき諸経費について次の6項目を挙げている。①消耗された生産手段を置き換えるための補填。②生産を拡張するための追加部分。③事故や天災による障害等に備える予備ファンドまたは保険ファンド。④生産に属さない行政費。⑤学校や衛生設備のような、いろいろな欲求を共同で満たすのに充てられる部分。⑥労働不能者たちのためのファインド。

（事前に提出した当日報告は以上）

（『ゴータ綱領批判』から今回の補足）

「ここでは明らかに、商品交換が等価の交換であるかぎり、この交換を規制する同じ原則が支配している。内容と形式はかわっている。なぜなら、変化した事情のもとでは、誰も自分の労働のほかにはなにもものもあたえることができないから、また他方では、個人的消費資料のほかにはなにもものも個人の所有にうつりえないから、である。しかし、個人的消費資料が個々の生産者の間に分配されるときには、商品等価物の交換の時と同じ原則が支配し、一つの形の労働が、他の形のひとしい量の労働と交換されるのである。

それゆえ、平等な権利は、ここではまだやはり原則上、ブルジョア的権利である。もっとも、ここではもう原則と実際とが衝突することはないが。・・・

このような進歩があるにもかかわらず、この平等な権利はまだつねにブルジョア的な制限に付きまといわれている。生産者の権利は、彼の労働給付に比例する。平等は、ひとしい尺度で、すなわち労働で、測定される点にある。

・・・この平等な権利は、不平等な労働にとっては、不平等な権利である。・・・」（『ゴータ綱領批判』国民文庫版、43～44頁）

● 労働に応じた分配、労働証書制は、市場とつながっていることがここで表明されているのではないか。

いずれにしても、無意識のうちでの本能的共同行為による貨幣生成論、つまり、生産者が自らの財やサービスに価格をつける行為の背後に、そうとは意識はせずに、金を貨幣にする共同行為への参加がある、という真実はどのようにすれば理解されるのか、ということについて議論したい。理解されるのが無理なら、理解なしでも貨幣を生成させないような交易関係をつくりだす運動ができる、ということでもいい。

参考文献

結城剛志『労働証券論の歴史的位相：貨幣と市場をめぐるビジョン』本は品切れだがネットで読める。

結城剛志「背理の先に何があるのか——反資本主義、労働証券、労働者自主管理」（『経済理論』第49巻第3号）これもネットで読める。